

インタビュー

～ひとはくの開館20周年によせて～

貝原俊民（兵庫県前知事）

プロフィール：1933年生まれ。東京大学法学部卒業後、自治省入省。1970年兵庫県課長、部長、副知事を歴任。1986年～2001年兵庫県知事。2002年5月～2006年3月 財団法人阪神・淡路大震災記念協会理事長。2006年4月～2012年3月 公益財団法人ひょうご震災記念21世紀研究機構理事長、2012年4月から同特別顧問。

聞き手：武田重昭
2012年3月22日

【田園文化都市構想を牽引する博物館】

博物館の発想のきっかけは、北摂・三田ニュータウンの建設という日本でも有数のプロジェクトの推進とかかわっています。このニュータウンは、1970年代から構想づくりをはじめ、本格化するのは80年代に入ったころですが、その頃になると自然破壊が問題になってきていて、自然と調和した開発を目指すべきだという発想が出てきたんですね。丹下健三さんに基本構想の検討をお願いしたんですけども、自然と調和した新都市づくりの具体的なプロジェクトとして、ニュータウンの真ん中であって、従来の発想だと埋め立てて宅地にすべき深田谷一帯を保存して、新都市のシンボルとしての緑地にすべきだという提案がありました。しかし、谷ですから橋をかけないといけなくて、それを賑わいや交流で有名なフィレンツェのポンテヴェッキオ橋のようなまちの中心施設として建設しようということになりました。橋だけ先にできたんですよ。具体的にどんな施設にするか決まらないまま、懸案になっていたんです。

次第にまちが整備されてきたことを契機として、ひょうご北摂・丹波の祭典ホロンピア'88というイベントを開催しました。北摂・丹波をどういう地域にしていくのか、阪神間の都市のスプロールが進むのをなんとか抑制しなければならない。ゴルフ場開発も最盛期の頃でしたしね。そこで、このホロンピア'88では、自然と人間との調和をテーマに、地域住民の皆さんに地域の将来像を考えてもらうことにしました。このイベントのなかで、IFHPという国連組織が主催する住宅計画についてのシンポジウムがありました。

そういったことの中で新都市のコンセプトがだんだん固まってきました。北摂・三田ニュータウンは、ベットタウンをつくるのではなく、そこに住む人間の「生活創造空間」をつくるというものです。経済活動を行う阪神間が中心で、ニュータウンは郊外の住宅地というのではなく、ニュータウンの「生活創造空間」が中心で、その郊外が阪神間だという発想です。田園に囲まれた生活文化が中心となるという「田園文化都市構想」をつくったんですね。

そうすると、ニュータウンには住宅だけではなく、いろいろな生活文化のための施設が集積しないといけない。だから小中学校はもちろん、大学や文化施設なんかがなければい

けない。そのなかにこの博物館という発想のきっかけがありました。博物館について最初はIFHPの提言を受けて、「人間居住研究センター」をつくらうと考えられていました。田園文化都市という世界に冠たる新都市をつくるわけだから、そのことについての知見が得られるような研究センターをニュータウンの中心施設としてつくらうという発想でした。ところが、実際まちができていくと、いまさら研究ではないだろうということになって、自然系の博物館をつくったらどうかという考え方になりました。

また、当時はちょうどバブルに差し掛かったころで、東京ディズニーランドのようなテーマパークが注目を集めていました。そこで、自然系のテーマパークをつくれれば40万人程度の集客が期待できるという提案がありました。阪神間の子どもたちがたくさん来るような施設のイメージでしたが、それはとても橋の下だけでは無理だということになり、それで近隣に博物館のフィールドをつくることにしたのが、今の有馬富士公園です。

このような背景で、「田園文化都市構想」の中核施設としてできた施設が『人と自然の博物館』です。この施設は、新しいコンセプトで新都市をつくるんだという意思表示でもあったわけです。幸いにして歴代の館長さんにご尽力いただいて、素晴らしい博物館となってきていると思っています。そのこともあって、北摂・三田ニュータウンは、10年以上人口増加率NO.1を維持した、日本でも有数のニュータウンになりました。

【参画と協働の県政を担う博物館】

博物館の体制については、初代館長の伊谷先生にもいろいろご検討を頂いて、どういうジャンルの研究をするのかとか、研究員40名体制や姫路工業大学の研究所として講座制とすべきだとかいう考え方を固めて行きました。日本ではじめての試みでしたから、担当は大変苦労したと思います。文部省もはじめはびっくりしていましたが、最終的には応援してくれましたね。

あの頃はいろんな意味で時代の転換期でした。日本が明治以来、先進国にキャッチアップする努力をして、ようやくキャッチアップできたといわれるのが1970～80年代ですね。「JAPAN as NO.1」とかいわれたり、G5ができて日本が

メンバーに入るなど、まさに自他ともに日本が経済先進国の一員になったと認めたのがこの頃です。そういう時期になって、今までのような成長型の社会モデルが通用しなくなるのではないか、成熟型社会にしていくべきではないかなどと言いながら、成熟型社会とはどういうものなのかについて日本全体がまだはっきりしたコンセプトをつくることができていない時代です。キャッチアップするまでは先進国のモデルがあったので、そのいいところをどんどん吸収して成長してきたけれども、キャッチアップしたら、自分でモデルをつくっていかなければいけない。そういう手本がないまま内需拡大政策をとって、それがバブルになっていくわけです。これが1980年代後半から90年代です。

このような時代でしたから、私たちはどういう社会構造にすべきかを必死に考えていましたね。ニュータウンだけでなく、兵庫県政全体がそうでした。種々検討した結果、「こころ豊かな兵庫」をめざすことを県政スローガンとして掲げました。具体的には、「こころ豊かな人づくり」、「すこやかな社会づくり」、「さわやかな県土づくり」の3つの柱で、県民運動方式による教育・文化、生活・福祉、生活環境のレベルアップをしようとする考えでした。それまでの「生産」を重視した成長型社会から、住民の「生活」の豊かさをめざすのが成熟型社会ではないかと考えたのです。北摂・三田ニュータウンは、まさにそれを具体化するプロジェクトの一つで、生活を支える文化・教育施設をつくって、そこに人が集まってくるまちづくりを進めることにしました。そのイメージの中核を占めるプロジェクトが『人と自然の博物館』なんです。

これからの人口減少社会では、いまのような製造業中心の考え方ではだめになるでしょう。国民がいま求めている教育産業とか健康福祉産業といった分野でもっと需要に応じてマーケットを拡大して行く必要があります。博物館で勉強したい人はいっぱいいるわけですから、その要求に的確に応えられるようにサービスを拡大していかなければなりません。既に実践して頂いている「地域研究員」のような人たちがどんどん増えていけば、それがまさに参画と協働の県政だと私は思います。そのような輪がひろがっていくと、例えば子育てが大変で働きに出られないお母さんたちのために、地域で幼児教育などを担っていくこともできるかもしれない。その結果、女性もどんどん働ける社会構造をつくることができる。そうすれば、高齢化も人口減少も解決することができるわけで、私は東日本大震災からの復興では、そういう社会モデルの創造に取り組むべきだと思っています。

【「ひとく」新展開の成果】

そういう思いでつくった博物館ですから、うまくマネジメントしていければ、それが発展して行く環境は十分そろっているという気がしていて、予算も限られていますが、あとはやり方なのではないかと思っていました。それで、『人と自然の博物館』から『ひとく』への「新展開」をやって頂い

て、博物館の方向性を明確に打ち出して頂いたことはとてもありがたかったですね。また、そのために、口で言うだけではなくて、実際にマネジメントをどうやっていくのかについても、博物館らしい発想できちんとしたシステムをつくって頂いたことは大変評価すべきことだと思います。この新展開で数値的な目標をどう達成したかということもあるかもしれませんが、それとあわせて新しいコンセプトを確立して頂いた功績が非常に大きいんじゃないでしょうか。

博物館の価値は、要は人ですからね。いい人に来てもらわなければいけない。そのためには、日本の研究者は大学で研究したい人が多いので、はじめの頃から講座制にする考え方でした。館長をはじめ研究員にも喜んで来て頂けるような環境を整備しようということで、全国にも例を見ないような講座制の体制にしたんです。しかし、大学の先生になるのだからといって、一般県民には難しい高度な研究ばかりされても困るなあと心配していたことも事実です。そして最初は少し偏りつつあるようにも見えました。県の公の施設としては、県民に対するサービスをして、住民がうちにはこんな素晴らしい施設があると自慢できるような施設でなければいけない。そうなると住民も度々博物館に足を運ぶし、外からお客さんも住民が連れてくるようになる。

これからの成熟社会において大切なテーマは、住民一人ひとりの人間性を向上させることです。そのためには生涯学習が重要になってくる。その拠点の一つになる博物館は、単に研究者の学術的な部分だけではなくて、市民に開かれた博物館としての役割を重視していく必要があります。私たちが期待していたそのような博物館像を「新展開」のなかで示して頂いたということは非常にありがたかったですね。

【日本文明の美質を世界に発信するために】

阪神・淡路大震災でも今度の東日本大震災でも、大きな犠牲を出しているんなことを教訓として学んだわけですが、最大の教訓は日本が災害列島だということだと思います。自然に対してもっと謙虚な生き方をしなければいけないということです。それと同時に西洋の近代文明では「個の自由」を重視しますけれども、自由だけではなく、お互いか弱い人間同士が助け合っていくというライフスタイルが大切だということです。この二つが、この災害から学ばなくてはいけない最大のテーマだと思うんですね。

日本文明は西洋文明とはいささか違うところがあると思います。被災直後の被災者の行動を見て外国の人たちが、日本人の自然災害の受け止め方、被災者同士の助け合いの行動にびっくりしていますが、これは根本的なところに差があると思います。西洋近代文明は、個の自由と科学技術を中心として発展をしてきましたが、日本人は個の自由というよりは、共助の思想をもってお互い助け合って生きていくという発想をするし、科学技術というよりはむしろ精神的なものを大事にするという文明だと思います。日本の自然は豊かな稔りを

もたりますが、ヨーロッパと違って一面では厳しい気候風土で、ひと言でいえば災害列島といわれます。そこで暮らしていると、お互い助け合っていくとか、自然に対して敬虔な生き方をしていくとか、そういうことがDNAとして蓄積して行ったのではないかと思います。そしてこれこそが、21世紀においては人類全体にとって最も大切な財産になる考え方ではないかと思うんです。なぜなら、西洋の個の自由や科学技術を中心とした文明は、世界全体に広がっているわけですが、それによって自然破壊であったり、資源やエネルギーの枯渇だったり、あるいは地域紛争だったり、社会格差の拡大だったり、そういう問題が地球全体に広がってきている。このような問題を人類が克服するために何が必要かといえば、それは先程から述べている日本文明の美しい資質、「美質」をもっと国際社会に情報発信をして、文明社会のあり方を問いかけていかないといけないと、私は強く思っています。

そういうことを前提として、博物館のことを考えてみると、自然への畏敬の念を生み出すような自然系博物館としての研究や人材養成ということが大変重要性を帯びてきているのではないのでしょうか。文明論的にどうなのかということまで議論してもらって、同時にそれを単に研究で終わらせるのではなくて、県民に対して情報発信をして、県民が人格形成をしていくなかで、日本人の持っている「美質」をもっともっと伸ばしていくべきではないかと思えます。そういうことを兵庫県政はずっと求めてきています。兵庫県は「ものの豊かさ」よりも「こころの豊かさ」を志向するような日本人の価値観に応えるような県政を進めようとしてきている。そういうなかで、自然への畏敬の念を深めるような研究を進めると同時に県民にそういう体験をしてもらうことが、自然系博物館の存在価値として、大変大切だと思います。

こころ豊かな兵庫をめざす県政の中で、これまでにいろいろな施設をつくってきています。例えば、景観園芸学校やコウノトリの郷公園、西はりま天文台や考古博物館などです。いろいろ県立施設が揃っているわけですから、これらのネットワーク化を図って、さらなるアウトリーチを進めれば、もっといろんな可能性がひろがるのではないかと期待しています。

熊谷信昭（兵庫県立大学名誉学長）

プロフィール：1929年生まれ。工学博士。第12代大阪大学総長、大阪大学名誉教授、兵庫県立大学初代学長（2004年4月～2010年3月）、科学技術会議議員などを歴任。2010年4月より兵庫県立大学名誉学長。2011年4月より 公益財団法人ひょうご科学技術協会 理事長。

聞き手：武田重昭
2012年3月23日

【大学と博物館のユニークな一体化】

まず、はじめに申し上げたいのは、兵庫県立大学の教員と博物館の研究員とが互いに双方を兼ねているというのは、他には余り例をみない非常にユニークな、きわめて勝れたシステムだということです。日本の博物館は一般にあまり研究活動が活発ではないと言われているようですが、人と自然の博物館では、県立大学の教員が同時に博物館の研究員でもあり、また博物館の研究員が同時に大学の教員でもあることによって素晴らしい研究成果をあげていただいています。また、それらの研究成果を踏まえて、博物館を訪れる人たちや地域の住民の方々に生涯学習の場として、自然に対する興味や理解を深めていただくような活動ができています。このような私たちで研究成果を社会に還元できる仕組みは、博物館と大学による地域貢献の新しいモデルだと言えます。

さらに、大学の教育の面でも、フィールドでの研究や経験に基づいた教育・指導ができ、学生達も実践的な学習や実習ができるというのは非常に魅力的なことだと思います。大学と博物館の連携というより「一体化」しているということで、自然・環境問題にも興味を持つ学生を育てる生きた学習の機会を提供できることにもなっています。

研究施設でもあり、教育施設でもあり、社会貢献施設でもあるという人と自然の博物館の特色は、兵庫県が全国に誇れる素晴らしい仕組みだと思っているんです。

【兵庫の地域特性を活かした社会貢献】

兵庫県立大学は三つの県立大学とその附属研究施設などが統合されて創立された大学なので、そのキャンパスや研究施設などは兵庫県内の広い範囲にわたって分散しています。大学のキャンパスがいくつもの場所に分かれているというのは難点ともいえますが、その成り立ちからくる与えられた環境条件をプラスに活かす道もあることを考えなければなりません。実際、県内各地のいろいろな地域に大学の特色ある学部・学科や研究施設などがあることで、大学と地域との直接的な接点が全国的に広がって、大学と地域社会との親近感が深まることになりまし、教育・研究や社会貢献の視点から面白い面がたくさんあり得ると思っています。

私は兵庫県立大学の入学式のときに、いつも「皆さん方は、豊かな自然と多くの歴史的・文化的資産に恵まれた兵庫県の

全域に広がる規模をもつ兵庫県立大学に入学された幸運を活かし、是非、在学中に特色ある各キャンパスや、本学の多彩な研究施設、例えば、1億4千万年前の恐竜化石の発掘・調査で全国的な注目を集めている三田の「人と自然の博物館」や、淡路島にある、NHKの朝の連続ドラマ「わかば」の舞台にもなった「景観園芸学校」、国の特別天然記念物コウノトリの野生復帰で大きな話題となった豊岡の「コウノトリの郷公園」、一般の人が直接目で見ることのできる望遠鏡としては世界最大の天体望遠鏡をもち、10億光年先の天体を誰でも見ることのできる「西播磨天文台公園」、等々をご家族や友人達と連れだって歴訪されることをおすすめします。兵庫県立大学では、このような本学の多彩な特徴と、兵庫県の持つ豊かな地域的特性を最大限に活かし、地域と連携した教育や社会活動を全国的な規模で展開する「全県キャンパス構想」というものも実施しています。」という趣旨のことを新入学生やそのご両親などに話してきました。

複数のキャンパスを持つことは国際的にも国内的にも珍しいことではなく、最近ではむしろ多くの大学がさらに新しいエクステンション・キャンパスを設けるために積極的に取り組んでいます。すでに県内各地にキャンパスを持つ兵庫県立大学は、これをメリットとして十分活用し、それぞれの地域に密着し、それぞれの地域の特色を活かしつつ、地域と共生・連携して地域社会の発展にも貢献していくことは、公立大学として非常に望ましい姿であるとも言えるのではないかと思います。人と自然の博物館などはまさにこのような特色を代表する施設ですね。

【人と自然の共生の重要性】

国連のなかに環境問題を専門に扱う UNEP（国連環境計画）という機関があるのですが、そこが大阪に環境技術に関する拠点をつくるということで、それを支援する地球環境センターという財団ができて、私はそこの初代の理事長をやらせていただきました。その時にいろいろな経験をさせてもらいましたが、ケニアのマサイマラ国立保護区で本物のアフリカの広大な自然に触れたことなどは、貴重な経験として今でも特に印象に残っています。

私はいま、ウォーキングにはまっているのですが、いろいろなところを歩いていますと、ますます自然や環境のこと、

まちの緑や都市景観、人と自然の共生、などというようなことに関心が高まってきます。

人と自然の共生の考え方で興味深いと思ったのは、私の両親のお墓や谷崎潤一郎さんのお墓などもある京都の法然院というお寺の貫主さんのお話で、「仏教には生きとし生けるものすべてを表す「衆生（しゅじょう）」という言葉があって、人と自然は本来一体のものであるとして、もともと人と自然とを区別してはいない」ということなんですね。人間とそれ以外のものを区別して、人間以外の周囲のものを人とは別に「自然」というようになったのは西洋の思想が入ってきた明治以降のことなんだそうです。「生きとし生けるものはすべて一体」という日本古来の自然観に学ぶということも大切かもしれませんね。

いずれにしても、人と自然を一体のものとしてその共生を考えるということは、これからますます重要なテーマになってくると思います。

【「異分野間の連携・融合」と「自然と生物に学ぶ」こと】

私は新しい科学技術の展開や新産業創出の扉を開くためには、二つの重要なポイントがあると考えています。一つは「異分野間の連携・融合」を図ることで、もう一つは「自然と生物に学ぶ」ということです。

「異分野間の連携・融合」の重要性という点で言えば、人と自然の博物館をはじめとする県内のいろいろな施設がそれぞれ孤立しないで、それぞれの知識や知見などに常にお互いに関心を持って注目しあうことが研究者にとって非常に大事だということです。研究者は「わき目を振らずに」ではだめなんです。「わき目を振って」他分野の手法にヒントを得たり、場合によっては協力・連携を図るのが非常に有効な場合がよくあるのです。他の分野を見て、新しい考え方とか新しい知識を得て、それを自分の研究に有効に活用すること、理系の人は文系のことを、文系の人は理系のことを学ぶというようなスタンスが大切です。博物館の中にもいろいろな分野の専門家がおられますが、お互いに連携・融合を図ることが大切でしょう。

アメリカでは、以前からシングルメジャーでは発展性がなく、ダブルメジャー、さらにはマルチメジャーの人間が良い仕事をすると言われていました。実際、そのような例はいっぱいあります。異分野間の連携・融合というのは、人間形成の上からも、あるいは良い仕事や勝れた研究をする上でもいろんな意味で大事なことなんですね。

「自然と生物に学ぶ」ということでは、自然と生物には未だ十分解明されていない不思議なことがいっぱいあって、本当に新しい知識やアイデアの宝庫であると言うことができます。カタツムリの殻はなぜ汚れずにいつもピカピカなのかということ調べて汚れないタイルを開発したり、魚が群れをなして泳いでいても決してお互いにぶつからないのはなぜ

かということの研究して、前後からの衝突はもちろんのこと、側面の接触事故も決して起こさない自動車をつくらうとしたりしています。自然と生物はまさに新しい知識やアイデアの貴重な源泉として大きな可能性を秘めているのです。

「異分野間の連携・融合」と「自然と生物に学ぶ」という二つの重要なポイントについて、人と自然の博物館は非常に理想的なシステムとしてつくられていると思います。ぜひこれからも十分にこのシステムを活かしていただきたいと思います。

【これからの「ひとく」に期待すること】

人と自然の博物館の今後に期待することを申し上げるとすれば、一つは今よりもさらに多くの学生を受け入れてもらいたいと言うことです。学部の卒業研究や大学院の修士・博士の研究をする学生達をもっと積極的に受け入れて、一緒に研究に取り組んでいってもらいたいと思います。そうすることによって、学生達は目新しいテーマについて良い指導を受けながら実践的な研究をすることができるようになりますし、博物館にとっては若い学生達の参加によって活性化につながるのではないかと思います。

また、新聞などいろいろなところで「人と自然の博物館」に関する記事を目にしますが、研究員が論文を発表したり、メディアなどに取り上げられる際には、「人と自然の博物館」における役職名と同時に、必ず「兵庫県立大学」の教授とか准教授という肩書きも書いてもらうようにしてほしい。それが兵庫県の持っている素晴らしい仕組みなんですから。

私の母親はいつも「自然や植物のことが好きな人に悪い人はいない」と言っていました。確かにその通りで、そういう人達はみなさん良い顔をしておられます。人柄が顔に出てくるんですね。人柄や人格の形成にも、自然に親しみ、木や花を愛するという事は非常に大事なことなんだと思いますね。これからもそのような子供たちをたくさん育てて行ってもらいたいと思います。

